

## B 15 被服材料としての皮革の性状に関する研究

### 2. 豚衣料革の剛軟度の検討

埼玉工芸試 ○白山琢持 東京農工大 久保知義 昭和女大 岡村 浩

目的 東京における豚革生産量は、わが国の豚革生産量の約90%を占め、豚革製造業は東京都の有力な地場産業の一つである。豚クロムなめし革は年間約600万枚生産され、その約50%が衣料革であり、衣料革の約60%が輸出されている。国内においても豚革は衣料用素材として広く使用されるようになったが、豚革の品質基準は規定されていないため消費者間で種々の問題が生じている。したがって衣料用素材としての豚革の性質、特に機械的性質を知る必要がある。そこで本報では豚衣料革の剛軟度について検討した。

方法 試料革として市販の衣料用豚革30枚を用いた。試料革の全面を21部位に分割し、各部位から試験片を採取した。スライド法による剛軟度(剛軟性)はJIS L-1096に準じて測定した。なお試験片は長さ10cm、幅2cmとした。ガーレ法による剛軟度(曲げ反ばり性)はJIS L-1096に準じて測定した。このとき試験片は長さ5.59cm、幅2cmとした。さらに機械的性質として引張強さ、切断時の伸び及び引裂強さをJIS K-6550に準じて測定した。各試験片は、20℃、65±5%の恒温恒湿器に72時間静置した後、試験に供した。

結果 豚衣料革の剛軟度はスライド法及びガーレ法とも、革の頭部から尾部に向かって増加する傾向を示し、すなわち革が固くなることを示した。このことは、機械的性質の傾向と類似していることを知った。見掛密度は、革の頭部から尾部にかけて大きくなり、革の線維組織構造の差異によるものと考えられた。剛軟度、見掛密度及び伸びの間には有意な相関性が認められた。